

パラレル文芸部。

枕くま。

小此木卓也が盛大なくしゃみをする、エントランスに居た男女数人が驚いたような視線を向けた。卓也は気まずそうに首を疎めて身を縮め、マスクを忘れたことを悔やんだ。今日は黄砂と花粉が例年の二倍近く飛んでいるらしいと朝のニュースで言っていたのに、焦っていたこともあって、ついいつもの癖でしないまま外へ出てしまったのだった。

昨年から花粉症の症状が表れ始めていて、今年は事前に予防策としてマスクも薬も買い込んでいたのに、この様だ。大学生活に於ける長い春休みのおかげで、この身は怠惰に染まり、危機管理能力まで怠けることを覚えてしまったように、卓也には思えた。

緩やかな部室棟の雰囲気を感じながら、埃っぽい階段を上がる。部室の鍵を管理するサポート室に寄って鍵を借りた。やはり、運動部の貸出しが多く、文系では卓也の所属する部以外には漫画研究会のみが貸し出されていた。卓也の聞いた話によると、漫画研究会は大変活発で対外活動も盛んらしく、一昨年には市のキャラクターデザインも行ったそうだ(因みに、そのキャラクターはともドラえもんに似ていた)。その功績が

認められ、特別予算が下りたとか下りないとか。

けち臭い文化会が予算の使えないはずの電化製品の購入を許可したという話も聞く。何にせよ、卓也には関係の無いことだ。

鍵を手の中で弄び、休み前にワックス掛けされて久しい廊下に行く。学生の数は疎らで、大抵、運動部ばかりだ。卓也のよな文化系クラブ員の姿は見えない。

廊下の角を二度曲がり、整然と並ぶ円机と椅子の群れを脇目に、五つある扉の三番目で卓也は足を止めた。

『文芸部』

と、太めのマジックインキで書かれた不細工な表札を眺め、ふと立ち止まる。そっと耳を澄ましてみるが、静かなものだった。遠くのグラウンドから野球部の掛け声が虚しく響いてくる。ドアノブを回してみると、当たり前だが閉まっていた。卓也は薄く溜め息をつく。

サポート室に鍵があった時点でわかっていたことだったが、まだ誰も来ていないらしい。先輩が合鍵を用いた可能性に賭けてみたのだが、それも無残な灰と化した。腕時計を確認すると、約束の時間まであと三分。遅刻しそうになって慌てていた自分が馬鹿みたいに思えた。

卓也は持っていた鍵を挿し込みながら、
「……こんなんで大丈夫なのかよ」

と、小さくぼやいてしまう。

鍵を回し、ガチャリと小気味よい音と、ギギギと引きつるような音と共に、閉ざされていた部室の空気がふわりと鼻先を掠める。非常に埃っぽい。

「ハ、ハ、……ハックシヨイ!!」

思わずくしゃみが飛ぶ。ぶええ、とだらしない声がこぼれた。休み前にちゃんと掃除したはずなのに、二週間でも埃は積もるのか。それとも掃除が雑だったのか。

卓也は煩雑に掃除を指揮していた新部長の手際を思い起こし、『ちゃんと』はしてなかったな、と考えを改めた。どう見ても物を適当に隅へ寄せただけの、だらしない空間がその思考を後押しした。

机の右端にはメモや筆記用具が山を為し、その両端に向かい合うように置かれたベンチには読みかけで放置された漫画雑誌が幾つも積み重なっている(小説などは本棚に奇麗に収まっているというのに)。休み中に誰かが来ていたのだろう。おそらく、部室を私物化している二回生のものだと思われた。咄嗟に顔を思い出そうとしてみるが、ぼんやりとして出てこない。それもそのはず。卓也は文芸部に席を置いてはいるが、活動にはてんで参加していなかったのだ。

ただ、会誌を発行するタイミングに、愚にも付かない掌編を律儀に提出してはいた。それで十分だと考えていたのだ。

卓也は物を書くことが好きなのであり、他人と馴れ合うことは時間の無駄であるように思えてしまう性分だった。協調性の無さは自覚しているが、面倒臭さが先に立って、気が付くと今さら部員面をしてミーティングに顔を出すのも変だと思えて、そうして一年が経った。

前の部長は作品さえ提出すれば文句はないという人だったので、卓也の我侷にも比較的寛容だったが、代替わりを経た新部長はそうは問屋が卸さねえとでも言わんばかりに卓也にミーティング参加を義務付けた。どうやら、副部長時代から据えかねていたらしい。

「特別扱いはしない」

そう面と向かって言われてしまえば、さしもの卓也とて参加しないわけにはいかなかった。

『書く場所』というのは、重要なものだ。どんなに書くことが好きでも、締め切りというプレッシャーを味わうにはそういうものがあつたほうが手っ取り早い。一度そのプレッシャーから外れてしまうと、書くことに身が入らなくなってしまうかもしれない。そんな危機感を抱いたからこそその参加承諾だった。

卓也がミーティングへ参加したのは冬休みが明けて直ぐの月曜日、五時限目の講義が終わった後のことだった。

いざミーティングに参加してみると、やはりあまり良い顔はされなかった。もちろん、これまでの不徳を、丁寧に頭を下げて謝ってはみたものの、表情が乏しいせいか、「心が凍り付いているみたい」と苦笑をかうに留まった。

文芸部の部員は卓也を含めて七人。そのうち、卓也と同じ一回生は四人、新部長を含む二回生が二人、三回生で就職活動中の元部長が一人という構成である。

一回生の男女比は三：一で、その紅一点は美人というよりか、可愛らしい印象の女学生であり、卓也にはむさくるしい男衆の中で一際輝いて見えた。

遠藤千沙子というその女学生は部の中で編集の役目を受けている。自分では書かない代わりに編集作業には何かとこだわりを見せるタイプだった。部員の中で唯一、彼女の家にのみプリンタがあることも、役職付になった所以である。部のムードメーカーでもあり、一年間も顔を見せなかった卓也に対しても、屈託の無い扱いをしてくれた。

バイトに明け暮れているのか、いつも忙しそうにしており、それ故に小説を書きもせず、かといって読むこともあまり無いそう、いったい何を目的に入部したのか、よくわからない人でもあった。

他の一回生ともそれなりに会話をしてみたが、どいつもこいつも読書はもっぱら漫画かライトノベルに限る者ばかりで、む

しろ一般書籍を読む卓也を忌避するような視線さえ寄越すのだった。彼等は執筆にも遠慮がちで、本当に何のために入部したのか、卓也にはわからない。バイトもしていないそうなのに、「忙しくて書けない」とこぼしていたのが少し引掛った。

それでも毎回、会誌には寄稿しているので、意義を果たしてはいるのだ。それだけで十分だと、卓也は思う。我俣でミーティングに参加してこなかった卓也とて、傍から見れば何のために入ったのやらわからない立場なのだ。

ミーティングの内容は、もっぱら三月に配布予定の会誌についてのことだった。三月の一日からの三日間、大学のある三満市では、文化祭が催される。

製本業者に指定部数分の印刷した原本を渡して製本をして貰い、完成した会誌を割り当てられたブースに展示し、配布するのだ。

会場は駅前の文化会館で、文芸部は創部当初から毎年参加しているのだった(卓也は寄稿のみだった)。しかし、今回はどうも雲行きが怪しい。

執筆陣の筆が中々思うように奮わず、皆苦悶の表情で頭を抱える有り様だった。卓也もその例に漏れなかったが、事前に書いた保険の掌編があったので、最悪の場合にはそれを使うことに決めていた。

各人の完成には相応の時間が掛かり、やっと完成した時には

二十分前の書き込みだった。卓也は不意に壁の丸時計に目をやる。時間は予定を大幅に食って既に三十分が経っている。一向に誰も来る気配が無いのは頭の痛い事態ではあるが、何よりも遠藤の書き込みが卓也の琴線に引っ掛った。

「……変だな」

知れず、卓也がつぶやく。

遠藤は一人暮らしで、学校から少し遠いアパートに暮らしている。それでも、徒歩で三十分、自転車を飛ばせば十分程で部屋に来られるはずだ(本人談)。

書き込みから二十分も経っているのに、部屋に着いていないのは少し妙だった。

まさか、外出を決意した傍から寝落ちしたわけでもあるまい。……事故、という可能性もある。もしくは、単純に自転車がパンクしたのかもしれない。しかし、この調子ならその出来事をツイッターに書き込みでもしているはずだ。卓也の指先がスクロールを早める。

徹夜明けの遠藤を気遣う他の部員達の書き込みが軒を連ね、ついに遠藤の書き込みが姿を現す。

『部屋に到着く!』

ついで、五分前の書き込みだった。

「……どういことだ？」

手元の画面を眺めながら、卓也が首を傾げる。書き込みを見た後、咄嗟に部屋を見渡してみたが、どこにも遠藤の小柄な背丈を見ることは無かった。

実は卓也より先に部屋に来ていたのでは、ということも考えてみた。トイレに行きたくなって、防犯のために先輩から預かった合鍵を用いて鍵を閉め、用を足しに行った可能性だ。しかし、何分待っても帰ってくる気配が無かった。女子のトイレは長いというが、幾らなんでも二十分は長過ぎる。

画面の中では、新たに『もう駄目だ。はかどらん』と書き込みが追加されている。この書き込みを信じれば、遠藤は部室内でパソコンを用いて作業しているらしい。もちろん、部室内にあるOB寄贈の型落ちパソコンは電源すら入っていないかった。更におかしなことに、他部員の書き込みも妙だった。誰もが部屋にきている風で、卓也が来ていないことを糾弾するような文面を書き込んでいるのだ。

まさか、部屋を間違えているのか？

卓也はそう思って一度廊下に出てみるが、不細工な表札は春休み以前のまま、そこにあった。念には念を入れて表札を取って裏を確認してみたり、五つ並ぶ扉を一つずつ確認してみるが、どこも開いていなかった。卓也が間違えている、という線は無さそうである。

もういちどベンチに座り、スマートフォンを覗む。

『あいつ、おせえな』二回生の新部長。

『忘れてるんじゃないですか？』一回生の田辺。

『もしくは、言いつけ破ってサボってるか……？』同じく一回生の軽部。

『まさかあ』一回生、編集員の遠藤。

『いやいや、わからんぞ？ なんせ一年もサボってた奴だし』新部長

『ヒヤッハー！ 遅刻だあ！』二回生、中藤。

各々、一部を除き、卓也の遅刻に対する書き込みをしている。

「好き勝手書き込みやがって……」

確かに遅刻しそうにはなったが、卓也はこうして来てはいるのだ。会場は確かに部室という話だったし、卓也に落ち度は無いはずである。

しかし、これはどういうわけだろう？

思い悩む卓也を差し置いて、ツイッター内では卓也の不安を煽るような書き込みがちらちらと続いている。

新部長などは、『不安因子は摘出すべき』などとうそ寒いことを言っている。他部員の書き込みが『まあまあ』などと、論じてはいるけれど、新部長は中々に本気のようなのだ。

「クソ、奴らどこに居やがるんだ」

ぐだぐだと管を巻く書き込みの列に辟易とし、卓也がぼやく。早く連中の居城に乗り込んで、誤解なのか畏なのか、知る由も無いが、事情をすり合わせて撤回させねば。すると、静寂を氣取っていた室内に、突如、他人の声が木霊した。

「それはまあ、ここ以外にあるまい」

「うわー!」

唐突な応答に驚く卓也。その拍子に勢いあまってベンチからずり落ちそうになった。

声の主は、そんならしくない卓也の行動を愉快そうに眺めながら、「現部長にも見せてやりたいな」と、卓也にとって余計なことをのたまった。

「……部長、脅かさないでくださいよ」

いつの間に関けたのか、入り口扉の前に、金本実広先代部長が立っていた。今日は珍しく、就職活動用のパンツスーツ姿である。居住まいを正しつつ、卓也がそれを指摘した。

「あれ、珍しい。今日は就職活動ですか?」

「珍しいとは失礼だな」

天然パーマのもさもさした頭を右手でバリバリ掻きながら、「それに、私はもう部長じゃあないよ」と緩やかに注意した。

細かなフケが飛び、卓也がヘクシヨイとくしゃみを飛ばす。

「ああ、失敬」

鼻水を垂らしながら、ティッシュボックスをメモと文具の山から発掘する卓也。当の金本は飄々とした調子で、別に悪いとも思っていないような軽い感じで短く詫びた。卓也は、いつものことかと特に突っかかりはしなかった。

この部に於いて、卓也が最も面識が深いのは、他でもない金本なのだ。その傍若無人さはあまり付き合いの深くない卓也でさえも、二度も会えば十二分に伝わるものだった。いうなれば、ちょっとした変人なのだ。……言い換えれば、少し、こじらせちゃった人でもある。

「それで、さっきのはどういう意味なんですか?」

鼻をかみつつ、卓也が金本へ問いかける。しかし、驚くべきことに金本は小首を傾げてしまっていた。

「どう、とは?」

「だから、他でもないココに他の部員が居るって、さっきご自分で仰っていたでしょう?」

金本のすっ呆けるような態度に、卓也の中で苛立ちが渦を巻き始めた。

「ああ、確かに言った」

「だったら――!」

「——しかし、」

金本が遮るように声を発する。

「私はその最後に、『かもしれない』という言葉を追加させて貰うよ」

「はあ？」

何が言いたいのだろう。卓也は思わず礼を欠く返事をしてしまったが、金本はどこ吹く風だ。むしろ、楽しそうにすら見える。もしかして、自分はからかきを受けているのだろうか。卓也は苛立つよりも先に困惑を覚えた。

「なに、ちょっとした思考実験だよ」

金本が戸を閉め、卓也の向かい側のベンチに腰掛ける。

「思考実験って、要は遊びですか？」

不信な顔をして、卓也が口を開く。「まあ、そのようなもんだ」と金本。「付き合ってくれるかい？」と問われ、不承不承に卓也は了解した。今のまま、一人で苛立ちを抱えていてもしょうがないと思えたのだ。最悪、他部員に糾弾されても先代部長が居れば、それ程怒りも買わないだろうという、ずるい算段も働いた。

さて、と金本が両肘を机に乗せ、言葉を紡ぐ。
「とりあえず、まずは私の立場を明確にしたい」

「……先輩の、立場ですか？」

金本が小さく頷く。

「そうだ。まず私は今日、純粹に君達の作業を手伝うために、こうして就職活動のただ中、やってきたわけだよ。前回のミーティングにも参加していて、確かに部長から『部室で作業をする』という旨を聞いている。しかしながら、私が今日こうして参加したのはあくまでふと思いついたからに過ぎず、事前に部長やその他部員に連絡を取った、ということはない」

「つまり、先輩は他の部員各位が俺をからかっているとしても、ご自分は『まったく関わってはいない』と、そう言いたいわけですね？」

「察しが良くて助かる。何なら、携帯の受信履歴でも確認してみるかいい？ どうせ、アダルトサイトの広告しか無いけど」

「……せめて就職活動に準ずるものであってくださいよ」
差し出された携帯を確認したが、本当にアダルトサイト関連のメールしかなく、卓也の頭が二段階程重くなった。……この人は、これで本当に大丈夫なんだろうか？

「ほらね、言ったとおりだろ？」

「ああ、はい。そうすね」

金本は妙に誇らしげだった。やる気の無い卓也の返事に、それでも金本は淡々とした調子を崩さない。相変わらず、どこかずれている。

「さあ、楽しい楽しい思考実験の幕開けだよ。君」
尊大な物言いで愉快そうに、金本が口火を切った。

「君は、平行世界というモノを知っているかね？」

金本の口調は静かな、物々しいものに変わっていた。そのシリアスな調子にしては、聞き慣れない、妙な単語が異彩を放っていた。卓也も仕方がないので付き合ってやる。

「平行世界って……数多くある選択肢の中、過去から分岐した複数の可能性の世界ってやつですか？」

「そうそれだ」

金本がにやりと得意顔になる。卓也はよっぽど『やつですか？』の後に『馬鹿ですね』と続けたかったが、一先ず堪えてみた。しかし、力強く頷く金本を見て、やはり馬鹿だと確証を得た気になった。もちろん、口にはしないが。

「君、よっぽど私を馬鹿だと思っっているようだが、」

「なんのことですか？」

「これは思考実験なのだから、ある程度突飛なことでも頭ごなしに馬鹿にするのは、君、いけないよ」

「別に、馬鹿になんかしてませんけど」

「そんな顔をして、よくも白々しい……」

金本物の物憂げな言葉に、卓也は思わず自身の顔に手をやった瞬間、それが稚拙な罵であったことに気付いたが、もう遅い。金本も一転、してやったりのいやらしい顔つきである。

「ほれみる、よっぽど思っっていたんじゃないか」

卓也は諦めたように肩を竦めた。

「……でも先輩。それも無理からぬことでしょうか？」

いきなり並行世界だなんだと言われて、はいそうですね素晴らしい！ とはいかないのも当然のことだろう。

「まあ、そうだな」

あっさり肯定する金本。表情は元の平然としたものに変わっていた。

「しかし、君。君は先ほど、大きなくしゃみをしていたね？」

「ええ、先輩のフケのせいだ」

「そんなわけあるか」

と、金本が不快そうに反論する。

「もしや君、花粉症なんじゃないか？ さっきサポート室で君の書いた鍵の貸出し帳を見たが、集合時間ギリギリだったじゃないか。おそらくは遅刻寸前で焦り、マスクをしてくるのを忘れたな？ しかも間の悪いことに今日は黄砂と花粉が例年の二倍だというし。私も今日はくしゃみがよくでて困っているん

だがね。……君、実はもつと前、エントランス辺りでも何回かやっつたろ？」

まるで、見てきたかのような物言いだった。

「……なぜさっきのくしゃみが先輩由来のものでないと言い切れるんです？」

淀みない追求に、あまり面白くない卓也は、適当な文句をつけてしまう。金本は、さも当然といった風に回答を述べていく。

「当然だ。フケがどれだけ細かろうが、空気中に舞う程軽いわけではない。どうあっても私のフケより、部屋の埃の方が逸早く君の鼻の粘膜を刺激するはずだ。もつとも、君の鼻息が馬鹿みたいに荒かった場合はどうか知らないがね」

卓也の表情が僅かに暗いものとなった。中々に憎たらしいことを言ってくれる。しかし、卓也がエントランスでくしゃみをしたことは、紛れもない事実なのだ。

「はいはい、確かにエントランスでくしゃみをしましたとも」と卓也が手早く敗北を認めた。

「しかし、なぜエントランスだと？」

「簡単だ。あそこは運動部員が多く出入りするので非常に埃っぽいらな」

「私もさっきしたよ」と金本が自身を指差す。卓也は今度こそ、大きな溜め息をこぼした。

金本の発言は一々受け手からの問い直しを前提としている

ものが多く、何処までも回りくどいのは常であり、傷だった。それが金本の変の一端なのだった。

「で、そのくしゃみがいったい、なんだというんです？」

いい加減据えかねてきた卓也だったが、その発言に対し、金本が露骨に嫌な顔をしたので、顔には出さないが、内心で顔を顰めた。余計な話は、まだ続くらしい。

「……何ですか、その顔は」

耐えかねてつい、金本の話術に沿うてやる。卓也と金本の付き合いは短いが、このまま流れに任せただ方が良いような直感が働いた。金本がこれ見よがしに深い嘆息をこぼす。

「君、もしかしてSFなどはあまり読まないのかね？」

卓也が首肯すると、やれやれと言いたげに首を左右に振った。金本はさも嘆かわしいとでもいう風に、瞼をそつと下ろした。嫌味なほどに長いまつ毛が、つられて揺れる。

「非日常というのはだね、くしゃみだとか、クワガタにチョップをかますだとか、大たいそういう何気ない出来事から始まるのだよ」

金本が夢見がちなことを言う。いつの間にかそのか細い指は鉛筆を練り、メモの裏側に猫型ロボット(ドラえもんズの誰かだろう)を落書きしていた。いやに巧い。

卓也はSFには明るくないが、それでも金本が碌な知識もないミーハーなのだろうということは目視で察することが出来

た。

「クワガタにチョップはどう考えても何気なくない奇行ですけどね」

「余計な茶々を入れてくれるな」

茶々を入れられる前提で話しているくせに、金本はそんなことを言っただけでひらひらと片手を振った。

「そこで、こんな説を立ててみた」

軽やかに振った右手の人差し指を、ピンと立てる。そして、朗々と、また突拍子も無いことを言い始めた。

「君はエントランスに入った後、くしゃみを発したことで、元居た世界から半歩ばかり離れた世界へと飛ばされたのではないか？」

部室内の空気が凍りついた。カラスの声が窓越しに響く。不敵な笑みを作る金本の目の前で、卓也の口が、あぐりと楕円を描く。幽かに戦慄くその口元は、「馬鹿だ」と言っているように読めた。その次、刹那の放心の後、卓也に湧き起ったのは純粋な憐れみだった。

「……就職活動って脳細胞を死滅させてしまうんですね初めて知りました驚きですね」

「まあ、そう言うな」

ならどう言えば良いというのか。本能に任せて、直接的に馬鹿と形容すべきだったかと卓也が真剣に頭を悩ませていると、金本が口元を綻ばせ、言葉を続ける。

「そうだなあ、例えば、君がエントランスでくしゃみをした時、近くに誰か居なかったかな？」

またもや、見てきたような物言いだった。卓也は少し、金本のこうした鋭い勘に、不気味さすら覚え始めていた。暗い霧が漂い始めた頭の隅に、あの瞬間の、エントランスの情景を探す。しかし、何故だかはつきりしない。卓也は「確か……」と曖昧な言葉を足して、

「……どこかの運動部員が二、三人居ましたけど」

金本は、へえと小さく相槌を打つ。
「少ない人数の割に、記憶が曖昧だな。推察するに、君は余程デカイくしゃみをして、恥をかいたと感じたね？　あまり相手を見ないような気をやっただろ。そして、そう感じたということ、相手は君のくしゃみに対して反応を見せた、ということに他ならない」

「どうだった？」と問われ、卓也は少しだけ顔を顰めた。記憶には薄霧が差してはいるが、確かにそうだったように思う。顎に手をやって、思考の溝をスコップでさらう。

「……なんか、凄じびっくりした感じでしたね。そんなに驚くかって思うくらいに」

「それだ」

金本が無遠慮に卓也を指差す。

「その瞬間、君は世界を半歩だけ、跨いだのだ」

「馬鹿だ」

「ついに直接的に馬鹿にしてきたな！」

金本が半目気味に卓也を睨む。卓也からすれば、『知るか』
と言ってやりたいところだった。

「しかし、そう考えれば彼らの反応も当然のこととわかる」

「ゴホンと咳払いをして、金本が継ぐ。」

「彼等は君の品性の欠片も無い特大くしゃみに驚いたわけではなく、さつきまで居なかつたはずの男が、唐突にエントランスに現れたから驚いたのだ」

馬鹿馬鹿しい。と即座に取り下げようとした卓也だったが、急に記憶の靄がサツと晴れ、エントランスに居た、あの運動部員達の驚愕の表情が大写しに浮かび上がる。

いけない。

卓也は小さく頭を振り、幾つも浮かぶ驚愕顔を消し去ろうと
していた。それは、ほとんど反射的な行動だった。

金本の笑みが深みを増す。

元々、人間の記憶というのは曖昧になるようになっていく。
そこへ、金本が明確なイメージを植え付けたことで、卓也の記憶が上書きされ、危うく固定化されるところだった。

「しかし、それだけでは証拠に乏し過ぎるでしょう？」

卓也の発言に、「もちろんだ」と金本も同意する。形の良い顎に手をやって、数秒の間を空けた。そして、纏まった思考でもって言葉を繋ぐ。

「そうだな、例えば、君の知る私と、今の私に差異があるだろう？ 君の世界の私は三月が迫ろうというのに就職活動をしてせず居たそうだが、私はこうして活動をしているのはどうだ？」

「どうだ、と言われましても……」

卓也としては、やっとなですか？ としか言えない。

「それなら、君は先ほど部室でくしゃみをした後、不審な顔をしていたが、推察するに、君は埃を気にしたろう？ ほんの二週間前に掃除をしたはずが、どうしてこんなに埃が溜まっているのか、と」

金本は机の一角を人差し指でなぞり、口元へ持ってきて、ふうと溶かす。舞った埃を厭い、卓也がぐっと上半身を逸らした。金本が小さく笑む。

「……確かにそうです」

「答えは簡単、世界が違うからだ。君の元居た世界の私は就職活動にでんで身の入らない駄目な奴で、そしてきちんと部室の掃除はされていた。君がくしゃみをした瞬間、周囲には誰も居なかつたんだろう。くしゃみに反応した人数を、君が曖昧にし

か覚えていない要因が、そこにもある。恐らくデカイくしゃみをした瞬間に世界を跨ぎ、それによって数多の可能性の中、その場に居たかもしれない運動部員が現れた。唐突な出来事に、君の脳は混乱を起こして記憶に曖昧さが生まれたのだ」

「待ってください。さすがの僕も急に人が現れば純粋に驚きますよ」

卓也がそう反論すると、金本は狩人のように鋭く目を細め、「そりゃあ、ふつうに生活している奴に限る」と芝居がかった調子で言った。

「君が日々周囲を気にして生活しているような玉か？ もしそうなら一年もミーティングに参加しなかったくせに、このことこうしてやってくるかよ。ふつうなら潔く辞めてしまうところだ」

痛いところを突いてくる、というか、痛いところを無理やり絡められたという印象だ。卓也は反論の材料を探す。

「なら、このツイッターの現象はどう説明しますか？」

卓也が自身のスマートフォンをかざし、金本に突きつける。本当に世界が違うのなら、こうしてインターネット上だけ元の世界と繋がっているなどということはあり得ないはずだ。

「君は何を聞いていた？ 私はしっかり『半歩』だけずれたと言ったろ？ 恐らく、君のくしゃみだけでは世界を渡り切ることは出来なかったのだ。故に、君の持つ電子機器の類だけが、

半端にあちらと繋がったままになってしまったんだろう」

そこで、ようやく卓也にも金本の言わんとすることに気がついた。

「つまり、ようやく当初の話に回帰してきたわけですね？」

「そうだ。各部員はまさしく、この部屋に存在している。しかし同じは同じでも、世界がずれているから姿が見えない」

紡がれる言葉は、どこか力強く、内にある確信めいたものを匂わせている。

「つまりは、そういうことだ」

重い沈黙が二人の間に纏わりついて、次に口を開くべき卓也の口辺に戸惑いを与えている。

どのように反論すべきか、卓也には放つべき言葉が見つからないのだ。しかしそれほどまでに、この平行世界移動説が確固たるものだと、到底、思えない。

常識が邪魔をしている。卓也の中の、常識が。

堰となり、異常な状況に対して、湧き立つ否定の意思が嵩を増す。しかし、水底まで淀むそれを、巧く言語化出来ないでいた。感覚的な反感が、最も始末に終えない。他者への伝達に齟齬が生じれば、それだけで伝達者の頭が足りないと思われてし

まうからだ。

それは意見ではない、と。

「どうした？ 反論を言ってくれないと」

金本の口調は楽しいな雰囲気、指先をトントンと机上に叩き、卓也の反撃を催促している。

当然だ。これは遊びで、金本はやられ役を買って出た。わざと突拍子もないことを言い、遊びを充足させようとしているのだ。言い換えれば、卓也は手加減されている。金本の立場では、ハンデが大きすぎるのだ。何故なら、金本は卓也に対して、絶対に取り得ないことを認めさせなければならぬからだ。

これは思考実験などではなく、舌戦なのだ。相手を屈服させた方が勝ちの、戦いなのである。

応えなければと、卓也が唾を飲む。当初の目的は既に関係なくなっていた。ただ、『負けてなるか』という強い意志が彼の中でぐらぐらと煮立っていた。故に、思考が纏らない。そんな中、待ちかねた金本が「5」と手のひらを卓也に向けた。

「4」

指の数が減っていく。時間制限を設けたようだ。

「ちよっと、聞いてないっすよ！」

「3」

金本は聞く耳を持たず、にやつきながら指を折っていく。「チッ」と構わず卓也が舌打ちを飛ばす。

「2」

もう時間がない。そう思考するや否や、卓也の内に芽生えていた、混沌とした渦を巻く違和と感覚と否定の意思が、ついと口を滑らせた。

「……常識的に、考えて、ありえません」

金本が、待ってましたとばかりに身を正す。

「へえ！ 常識？ それってどんなの？」

金本の声が、若干上ずっている。恐らく、興奮しているのだ。なんと大人気ない先輩だろう。二つも下の後輩を困らせて、悦に入っている。

『路頭に迷え』

と、渦の外側で卓也が毒づく。顔には出さず、思考を正すため、小さく空咳をこぼした。

まずは、常識の証明だ。卓也の脳裏に渦巻く違和感の白波を、丁寧に掬い取っていく。

「まず、前提として、違和感があります。それは、平行世界へ渡る条件が、あまりに曖昧過ぎること、というより、簡単過ぎます」

卓也が始めに抱いた違和感はそこだった。くしゃみ一発で半分平行世界に行けるのなら、爆竹一発で完全に至るのか。打ち上げ花火で何人神隠しだ。あまりに、常識を欠き過ぎている。「何気ない出来事で非日常が始まるのは、あくまでフィクション」

ンの定石であり、それを現実にて嵌めていく時点でしょうか
てますよ」

「ナンセンスだね。重要なのは、『場所』だ。この世にはパワ
ースポットというものがある。その一箇所のみで磁場が発生し
ていたり、重力が強くなっていたりする場所だ。そういった繊
細な場所で、特定の行動により起こる『力』が作用することで、
世の不思議は発生するのだ」

「しかし、それならこれまでも多くの人があの場でくしゃみを
したはずだ。体育館建設以来、行方不明者が出たなら、うわざ
になっけていてもおかしくないのに」

「そうとも限らないよ」

金本は余裕を持った口ぶりで、卓也を見据える。

「世界が辻褄を合わせてしまうということもある。ドッペルゲ
ンガーを知っているか？ まったく同一としか思えない二人
の人間が会ってしまつて、互いに死んでしまうという話だが、
それこそまさに辻褄を合わせるようじゃないか。もしかしたら、
ドッペルゲンガーとは並行世界の住人のことなのかもしれない
いな」

「それで、行方不明者はどのような扱いになるのでしょうか」

話が脇道へ逸れ始めたので、慌てて卓也が軌道修正を図る。
これ以上、余計な話は御免だった。

「簡単だ。日本では毎年何千人と行方不明者が出ている。その

一人となるよう事実が捻じ曲がるか、もしくは元々そんな人間
は居なかった、と、そうなるかもしれない」

「世界による辻褄合わせと言いますけど、それはちょっと都合
が良すぎやしませんか」

「SFとはそういうものだ」

それが全てだと言わんばかりにそう言つて、冷めた視線でも
つて卓也を見る。卓也も、その視線に向き合うように、目元に
力が籠もる。

「今は、現実の話です」

この世はファンタジーの世界ではなく、少し不思議なことに
も実際には意味が潜んでおり、そのほとんどは科学の火の下に
暴かれて久しい。まかり間違つても、卓也のような凡人の下に、
こんなやっかいな話が舞い込むはずがない。

「続けて」頼杖を突き、金本が言う。卓也がゴホンと咳をして、
言葉を継ぐ。

「……次に感じたのは、はっきりとした疑問です」

「自分が平行世界に踏み入つたとして、だったらこの世界に
元々居た俺はどこに居るのです？ この世界の俺が文芸部員
であり、その他部員もそうであり、更に今日が文化祭一週間前
であつて、会誌の編集が終わつて居らず、今日、まさにその追
い込みを行うということは、先輩、この世界の住人たるあなた
が保障しています。僕たちを手伝いに来てくださったんですも

のね？」

長々と捲くし立ててしまったが、金本はすっかり飲み込んでいるようだった。頭の回転が速いのだ。

「うん。でも、この世界の君が部室に来ていないのは、幸運と言えるよね」

金本はそう言ってほくそ笑む。先のドッペルゲンガーの話だろう。卓也はその話に少しの疑問を抱いていた。金本の言い分では、辻褃を合わせるのはあくまで『世界』であるのに対し、ドッペルゲンガーは人間同士の認識をトリガーとして辻褃合わせが発生しているところである。

もし、世界が辻褃を合わせようとしているなら、同一世界に同じ存在が発生した時点で発動していてもおかしくないと、卓也は思ったのだ。

その部分を軸に攻めてみようかとも考えた卓也だったが、問い詰めた傍から『その両者は関係ない』と言われてしまえばそれまでだ。先ほどの金本の回答は、恐らく、あえて曖昧さを残したのだ。どうしても捉えられるが故に、その裏には本件との無関係さを仄めかしているのだろう。卓也が攻めるべきは、確定した情報からであるべきだ。その答えを、卓也は既に持っている。

「そして、先輩は今日の追い込みが部室で行われることを知っていた。つまり、この世界でも追い込み作業はこの部室で行わ

れるのです。集合時間まで同じであることも、この世界の住人である先輩が保障していましたよね。俺が鍵を貸出した時間を見て、そう言っていた。だったら、この世界の他の部員達は、いったいどこに居るのでしょうか？ 何故、時間を過ぎても部室にやって来ないのでしょうか？ 答えは、ここが平行世界でも部室でもなくて、俺が今、まさにからかわれているから、そういうことになりませんか？」

しばしの静寂。静謐な空気が張り詰め、卓也もいい加減口を開けと金本を睨みだした頃。

金本はようやく「うん」と一つ頷くと、にっこりと晴れやかな笑みを浮かべ、「卓也君の勝ち！」と快活に言っただけのだった。

「……やっぱり勝ち負けだったんすね」

「当たり前だろう。遊びに勝ち負けが生じないことは、いつの世も、どの世界でもあり得ない」

そう言って、金本はクツクツと笑い、「楽しかったよ」とそのままの調子で言った。

「近頃はこうした遊びに付き合ってくれる輩が少なくてね。ずいぶん暇だったのさ」

「そりゃ、そうでしょうね」

卓也は「だって、面倒くさいもの」と続けようとしたが、あまりに酷かと遠慮した。どうせ、この先誰かに言われるのだら

うから。和やかな雰囲気に戻りつつある中、卓也が口を開く。

「ところで、先輩」

「ん？」

何気ない調子で卓也が話の転換を図る。金本が首を傾いだ。その眼が卓也の表情を窺うように覗き、固まる。

「漫画研究会の部室はどこですか？」

「漫研の部室に何か用でも？」

「とぼけないでください。最初から知ってたんでしょ？ 皆が漫研の部室に居ること」

金本は少し驚いたような顔をして、直ぐに顔を綻ばせた。卓也はまったく面白くない風に、眉根を寄せた。

「就職活動って、手ぶらでも出来るんですね」

金本は鞆を持っていなかった。卓也が抱いた違和感の種はそこだった。一度家に帰っていたのなら、作業を手伝うために着替えて部室に来るはずだ。しかし、そうせず、更に鞆も持っていないということは、誰かに預けているということになる。今日は部室での作業になるはずだったので、そもそも誰かに預ける必要がない。持ってこれば良い話なのだ。

ここから導き出せる答えは、金本は本来の作業場に先に出向き、卓也がいけないことに気付いた。そこで、他の部員には黙って部室を抜け出し、新部長によって情報を半端に理解させられた卓也を、わざわざ迎えに来たというものが考えられる。

金本が黙って部室を抜け出したという根拠は、金本が卓也を迎えに部室にやって来てからも、他部員によるツイッターの書き込みが途絶えなかったからだ。卓也が画面を見れば、未だ白々しい書き込みが続いている。そうして卓也の不安を煽っているつもりなのだろう。

同じ空間に居ながらの会話形式の書き込みは、さぞ不毛な時間だったろう。

「本当に連絡はしていなかったんだよ。まさか、君が作業場を教えられていないとは思わなかった。あいつも人が悪いから」

まったく、しょうがない奴だとばかりに金本が肩を竦める。その様子を見守りながら、卓也は最後の推測を投げ掛ける。

「あなたも相当悪いでしょう。これは完全な推測ですけど、漫研を作業場とするために、僕以外の人間を兼部させているんじゃないですか？ 一昨年からあの部は活発になったそうですが、恐らくその一端となった市のキャラクターデザインをしたのは、先輩、あなたでしょ」

金本がメモ裏に手癖で描いていたのは、まさにそのキャラクターだったのだ。あまりに似ていたので、一目にそれと気付かなかった。

「漫研部内でのあなたの地位は高く、それにかこつけて文化会と学校に話をつけ、プリンタを買った。しかし、それを頻繁に使用するのは流星に横暴が過ぎる気がしてしまう。それでは不

満に思った関係のない漫研部員によって、学校側にもリークされるかもしれない。そこで、あなたは文芸部による、漫研乗っ取りを計画したんだ」

そうすることで、文芸部の作業もある程度の誤魔化しが利くだろうと思っただろう。成果は上場。現在、漫研の部室は第二文芸部部室といったところだ。

一回生達が、執筆に乗り気じゃないのも、忙しいと言った訳もこれなら辻褃が合う。権力が磐石のものとなった金本は、漫研に入りたくてやって来た新入生を文芸部と兼部させた。そして、表向きには健全な部であることを示すため、彼等は文芸部の会誌だけでなく、漫研の会誌をも作成していたのだ。

「バレちゃったかあ」

金本は照れたような笑みを浮かべ、右手で頭を掻く。そもそも、卓也に隠していたのは新部長だ。

卓也にあまり良い感情を抱いていなかった新部長は、卓也が勘違いすることを見越して、わざと『部室』という表現を用いた。電化製品の購入が禁止されているので、文芸部室にプリンタは無い。なので、良く考えれば、この部室で遠藤が編集作業を行うはずがないのである。その後の印刷が出来ないのだからこれまでの冊子作成に携わっていなかった卓也には、そこまで考えが至らなかつたのだ。

どうして自分を漫研に引き入れなかつたのかと卓也が問う

と、金本は、だって絶対に入ってくれそうに無いと思っただから
だそうだ。

「言ってくれば考えましたよ？ 同意したかはわかりませんけど」

「いいよ、もう人数は十分だ」

金本が散らかった漫画雑誌を片す間、卓也はスマートフォン
の画面を見つめた。

ツイッター上では、部員達の白々しい書き込みが今でも存在
している。

卓也は画面上にキーボードを起こし、覚束ない手先で初めて
ツイッターに書き込みをした。

『気付いているぞ、馬鹿共』

以上が、とある文芸部で起こった、少し不思議な出来事である。

ようやく日常の空気を手にした文芸部室。和やかですらあった雰囲気を霧散させてしまうような気配が近付く。部室を直指して駆ける大きな足音が、扉越しに室内に響き渡る。

漫研部室へと向かう用意を始めていた二人は、ほとんど同時に顔を上げ、顔を見合わせた。

卓也の書き込みを見た新部長が怒りを露にやってきたのだろうか、卓也は暢気に思っていた。しかし、その考えはあっさりと裏切られる。

「すいません。遅刻しました」

ガチャリと扉を開いて現れたのは、部室を私物化していた二回生の中藤だった。

そういえば、ツイッターに一人だけ無関係なことを書き込んでいた。金本は、また遅刻かと中藤を嗜める。どうやら、常習犯らしく、それ故に誰もがノータッチだったようだ。件の中藤は急いで来たためか、汗の浮かぶ額を拭い、部室内にたった二人しかいないのを見て、

「あれ、先輩方だけですか？」

と困惑気味に問うた。どうやら、新部長の思惑は卓也以外にも効果を示したようだった。金本が口を開きかけるが、何か引っ掛けるものを覚え、眉根を顰めて閉ざす。それは、卓也も同じだった。何よりも中藤が言った言葉に対し、強い違和感を覚えていた。

「……先輩、方？」

中藤は二回生で、卓也はまだ一回生である。単純な言い間違いかと、卓也が自身の不審に答えを差し出した時だった。

差し出された答えを蹴散らすような、力強い足取りで廊下を走る音がする。数は恐らく二人だろう。バラバラに聞こえる中にもどこか規則性が認められる。今度こそ、新部長と他部員の誰かだ。きつと、そうであるはずだった。

「おーい！ 中藤！」

一人の音がする。男だ。

「今日はこっちだって言ってたろ？」

連なるように、若い女の声。

卓也は瞬間的に、金本を見る。すると、金本はちょうど卓也の方を見ており、二人の視線がしっかりと噛み合った。理由は簡単なこと。金本と卓也、互いに聞きなれた声がしたからに他ならない。

放心した卓也の目の前で、悲壮な表情を歪める金本が「……まさか」と呟くようにこぼす。

声に反応した中藤が、廊下と部室を驚愕の表情で見比べる。足音は毎秒大きくなり、金本が逃げ出そうと立ち上がる。しかし、時既に遅かった。

扉が伸びるか細い腕に押されて、隙間が生まれる。それはまるでスローモーションのような緩慢な動作で次第に広がり、遂

に薄暗がりの向こう側を明らかにしてしまふ。

「なに驚いてんだよ？」

中藤に向けられたその言葉は、何故か卓也の深層心理の更に奥底、根源から這い登ってくるような恐怖を覚えさせた。

そして、

卓也は見えてしまった。

隈の浮いた目元、通った鼻筋。魚のように生を覚えさせない凍りついた表情を、感情を押し殺して生きているような、そんな鏡写しの自分を。

その影に、若干幼さを感じさせるスカート姿の金本が居るのを。

部室を見た彼等の表情は、まさに放心だった。目の前に、知っている人間がいる。自分がそこに居るのだ。脳が覚える困惑は致命的だった。

「ドッペルゲンガーだ！」部室に居た金本が、弾かれたように叫ぶ。

それを契機とし、互いが互いを認識したその刹那、二人の卓也の身体は宙に浮かび、引つ張り込まれるように頭部をぶつ合う。

額と鼻先を押し付け合い、やや高めの体温から肌の柔らかさ、互いの揺れる眼球の動きから、口臭までを互いが察し、恐怖に慄く。

すると、次第に円を為すように、触れた二つの額がねじれて混ざり合い始めた。

嫌だ！

卓也が叫ぶが、既に言葉は意味を失くしていた。

中藤は眼を見開いたまま固まり、グラウンドから響いていたはずの野球部員達の掛け声も静謐に吞まれていた。舞い上がった埃の一粒一粒が空気中で制止している。

地球の自転が止まり、大気の流動が止まり、生物の活動が止まり、細胞の死滅が止まる。

——世界の辻褃合わせが、始まったのである。

溶け合う額は頭蓋を終え、遂に脳にまで達していた。恐慌状態に陥った二人の卓也は、その時、初めて互いの経験を共有した。

この世界の卓也は、現在二回生で、同じく二回生となっている金本と付き合っているようだ。出合いは同じ講義で偶然隣同士になり、試験前にノートを貸すよう金本に要求されたことが発端だった。試験後、礼と称して金本に一飯をおごって貰い、そのままずるずると薄い関係が続き、つい最近卓也の方から告白をした。金本は目を瞬かせた後、頬を赤らめて承諾した。

全てが走馬灯のように輝かしく、望ましい記憶だった。

迷い込んだ方の卓也が、混ざり合う目の前の卓也を見ると、右手の薬指に質素な指輪が収まっている。卓也達とまったく同

じ状況に陥っている隣の金本達の片方の指にも、同じものがあった。卓也の思考が混線する。

悲痛なまでの思考の叫び。運命を呪う、不条理に絶望する言葉の雑踏が波となって押し寄せる。

『嫌だ、嫌だ、嫌だ嫌だ！ せっかく出会ったんだせっかく出会えたんだなぜこんなことで別たれてしまわなければいけないんだ』

錯乱する思考をあちこちにぶちまける指輪の卓也。その視線が隣で混ざり合う二人の金本へと注がれる。彼女らの溶け合う速度は次第に加速し、指輪の卓也が手を伸ばした瞬間、高速の回転と共に質量が減少し、塵も匂いの微粒子すらも残さずに、弾けて消えた。

卓也の音の無い叫びがほとばしり、半ば溶け合う二人の脳に、怨嗟の負荷を刻む。

指輪の卓也の悲痛なほどに定まらない視線が、一転、重い重い負と破壊衝動とが加重され、混ざり合う片割れの元へと注がれた。

『お前のせいだ』

湧き上がる悪意は先細り、眼の前の自分を穿つ。殺意にも似たその衝動に身を任せ、立ち昇る怒りが感情の際限を易々と超えていく。

指輪の卓也が拳を振るい、目の前の自身へと打撃を見舞う。瞬間、逆の回転が起こり、次第に二人の肉体が解かれて原型に回帰していく。

指輪の無い卓也が、安堵したのも束の間、回転は止まる気配を見せず、加速度は留まるどころを知らない。

二人の卓也はアンドロメダのように渦を巻きながら、互いの心の奥底を暴き合い、罵り合い、性根の腐りどころを認識し合う。指輪の無い卓也は、絶望の最中、次第に死を望み始めた。

指輪の腕らしきものが、ねじくれながら蠢いている。レコードのようになって、未だもう一人の自分を殴り殺したいらしい。その蠢きが行き着く先が、既にどちらの肉体とも形容しがたいものだとしても。

しかし、揺れる波のようだった腕も、最後は円盤の一部と化して、回転するだけの存在に成り果てる。

『死にたくない』

無駄な願いと共に、二人の卓也は溶け合ったまま地獄へと落

ちた。

指輪をした卓也の強い恨みの念は、不条理の象徴としてやって来た、外敵への殺意であると共に、それは自身を殺す行為と、まさに同義であったためだった。

そして、時は動き出す。

彼等は互いを認識した瞬間、彼等の世界は収縮した。

彼等の身体は溶け合い、やがて混ざり合った彼等は、ぐにやりと円を為し、しばらく滞空した末、小さな破裂音と共に虚空の狭間へと消えてしまった。

ほんの小さな痕跡すら、残さずに。

世にも珍しい、異世界人同士の対消滅を垣間見た中藤は、しばらく放心した後、

「あれ、俺なにしにここに来たんだっけ？」

と不思議そうに呟き、小首を傾げつつ、漫画研究会部室へと足を早めた。